

度は悪性血液疾患に比し著明に減少しており分解量も正常か軽度増加にすぎない。この差異についてはさらに検討したい。

\*

## 62. クッシング症候群 3 例のアルブミン代謝の特徴について

水野義晴 森脇 要 梶山泰男

菅瀬 透 西川光夫  
(大阪大学西川内科)

Glucocorticoid はタンパク代謝を亢進させ、アルブミン代謝に対する影響として血中半減期の短縮、プールの減少、アルブミン合成量(平衡状態では分解量に等しい)の増加が報告されている。われわれは RISA を用いて、クッシング症候群 3 例(副腎腺腫 2 例, 過形成 1 例; 腺腫 2 例では尿中 17-OHCS のみ増量, 過形成例では 17-KS も増量していた)のアルブミン代謝を検討した。3 例に共通な傾向としてアルブミン合成量 (= 分解量) は正常、血管外アルブミン量がほぼ半減、血中半減期は短縮しているがわれわれが分解の指標とする血中アルブミンに対する分解率は正常範囲内であった。分解率, 分解量 (= 合成量) の増加のない理由について考察をのべる。

\*

## 63. 肝疾患のアルブミン代謝の検討 (第 2 報)

—とくに  $^{131}\text{I}$  アルブミン,  $^{51}\text{Cr}$  アルブミン

Doble Tracer 法によるタンパク漏  
出を中心として—

湯本泰弘 中川昌杜  
(岡山大学小坂内科)

肝硬変で血清アルブミン濃度 (SA), 総アルブミン量 (TEA), アルブミン分解(合成)量 (ATOV) の低下を認めたが, 広範な壊死と小葉の変形に加えて細胞の腫大を組織的に認める亜急性肝炎の症例でアルブミン代謝の軽度の低下のみを認めた。別の亜急性肝炎の症例は 4 年間の経過中に前後 3 回の再燃を繰り返し肝硬変へと移行して昏睡にまで陥った症例であるが, その症例のアルブミン濃度およびアルブミン代謝の変動をみると第 1, 第 3 再燃時に SA の低下と第 2 再燃時の ATOV の低下を呈した。治療により軽快するとアルブミン代謝も正常化に向った。第 2 再燃の回復期にはほぼ正常となったが治療剤として 6MP 75mg を投与したところ ATON は 225mg/kg と軽度の低下を示した。肝硬変における ATOV の低下に示

されるような合成能の低下に加えてさらに腸管への漏出が考えられるが, その有無を SQUIB 製の radiochromatid human serum albumin を用いて Waldman の方法に従い検討を加えた。糞便排泄率 (FE) は対照 5 例で投与量の 0.17~0.5% であり, タール便および潜血反応 (卅) を認めた症例に 1% を越えるものがあったが, 肝硬変 26 例の平均は  $0.54 \pm 0.20\%$  で対照群とのあいだに有意差はなかった。SA と FE のあいだには  $-0.35$  の相関があり SA の低下している症例においてさえも FE は小さくなかった。次いで  $^{131}\text{I}$ -アルブミンと  $^{51}\text{Cr}$  アルブミンを同時に静注してアルブミン代謝と  $^{51}\text{Cr}$  アルブミンの FE を同時に算定して TEA に対する FE の比を RFE として表わし, 肝疾患について比較を行なった。

対照 5 例の RFE は  $1.24 \pm 0.34 (\%/g)$  に対して肝硬変では  $p < 0.05$  で有意の高値を示した。とくに腹水, 静脈瘤および黄疸を伴った重症肝硬変症 5 例では明かな RFE の上昇 ( $p < 0.01$ ) を示した。タール便のある 1 例では REF 13.5 と高値を呈した。しかしながら軽症の肝硬変においては対照群とのあいだに有意差はない。以上により重症肝硬変においてはアルブミン合成能の低下に加えて比較的なタンパク漏出という因子があって, それらが SA の低下と TEA の減少を招来しているものと考えられる。

\*

## 64. 多核種 Tracer 法による水, 電解質体組成の測定

—とくに Na 量の評価法について—

村上元孝 黒田満彦 能登 稔 東福要平  
(金沢大学村上内科)

Na が広く細胞外液相に分布する電解質であることから, 細胞外液量 (以下 ECW と略) などの体液区分との関係を観察し, 体内 Na 量の表現法などに検討を加えた。

方法および成績:  $^{51}\text{Cr}$ -Ethyleue Diamine Tetracetate (以下  $^{51}\text{Cr}$ -EDTA と略) 200  $\mu\text{Ci}$ ,  $^{22}\text{Na}$  20  $\mu\text{Ci}$ , および  $^3\text{H}_2\text{O}$  2mCi を混合静注。  $^3\text{H}_2\text{O}$  は Werbin, H. らの方法に準じてベンゼンとともに蒸留分離し, 液体シンチレーターで効率 18.5% で測定。  $^{51}\text{Cr}$  および  $^{22}\text{Na}$  は  $\gamma$ 線波高分析により,  $^{51}\text{Cr}$  は 0.320 MeV を微分法で,  $^{22}\text{Na}$  は 0.511 MeV 以上を積分法で選別測定した。  $^{51}\text{Cr}$ -EDTA による ECW の測定は別に報告したが浮腫例でも 60 分以内に平衡を完了すること, 経時的変動の少ないこと, など適当といえた。Total Exchangeable Sodium (以下 TE Na と略) は Olesen の方法に従い, total body water (以